



講演

鎮西教學研究の一考察

石 井 教 道

本日は宗義研究會の催しによつて何か話をせよとの校長先生からの、お話もありましたし、前田先生からもお手紙を頂いて居りました様な譯でやつて参りました。

之云つて別に研究ありませんが、些か聖光教學についてお話したいと思つてゐるのであります。所が東京を出發する前に小西先生が、鎮西上人の研究を發表された事を承知しました。然るに今尙それを拜見する事を怠つて居りますので、小西先生の研究と私のものが何うなつてゐるか、全く同様のものか、違つてゐるのかも分らずに、此所に立つた次第であります、然し又夫々の見方によつて種々異つた研究も出來ますから、私は私の考へてゐる聖光教學に就て話したいと思ひます。

二祖上人の研究に就きましては、先づ教會史上から見る必要があるのであります。我が教會史上に於て鎮西上人の存在は非常に重大なものでありまして御承知の如く、法然上人は開宗に當つて寺院形態を取らずに、在家形態を取られたのであります。之は恐らく佛教々團史上、開宗祖師として珍らしい事と思ふ。若し似たものがありますれば、支那の信行が三階教を稱へ出したくらいのかと存じます。法然上人は、淨土宗の開宗に當りまして延暦寺を出て吉水の草庵に住まはれ一生涯寺を建立されなかつたのであります。それは御臨終に際しまして法蓮房が「昔から一宗の祖師さも仰がれる人には皆その遺跡があります、然るに今、御師匠様には一つの寺も御建立になつて居りませんが、御入滅に後に

は何所を御遺跡に致せば宜しゆ御座るませうか」云々尋ねした時、元祖は「跡を一廟に占むれば遺法遍ねからず、予が遺跡は諸州に遍満すべし、故如何んになれば念佛の興行は愚老一期の勸化なり、されば念佛を修せん所は貴賤を論ぜず海人漁人が芦屋まで皆これ予が遺跡なり」云々、自分一生涯生命したものには念佛の興隆にあるのであるから、跡を一廟に占むれば念佛の法門が一部分に限られ、普く行き渡らない、そこで念佛の聲する所は海人漁人の芦屋まで皆我が遺跡なり云々はれたのであります。斯の如く法然上人は生涯お寺云々言ふものを建てられなかつたのであります。この外、漢語燈錄第十に收載されてゐる没後遺誡の二ノ條の下ノ財産分配の所を見ても、吉水の西の舊房は長尊のものであるから返却する、又吉水中ノ坊ミ高昌の領地一所は感西大徳に付囑する等云々様にして、すっかり返へしたり、譲られたりして、後には何も残されなかつたのを見ても、所謂寺でなかつた事が解る。又、滅後の法要の如きもそうであつて、若し自分を追善しやうと思ふならば、寺を建てたりせず唯念佛を稱へよ云々遺言された事が勅傳に記されてゐるのであります。

而るに現在淨土宗に七千ヶ寺があるが、それは何時から始つたか云々申します云々、二祖上人が鎮西に善導寺を建てられ、其他、傳記によれば四十八ヶ寺を建てられた云々なつてゐますが、その全體が事實か如何うか問題あるにしても、兎に角、淨土宗に於て寺院形態をこる様になつたのは、鎮西上人から始つてゐると思ふのであります。然らば淨土宗寺院なるものゝ本質、使命、形態は何うあらねばならぬか。尤も現在の宗制、宗規の上には、寺院の等級或は住職等に就て色々規定はありますが、然し寺院としての宗教的使命や、本質や、形態の如何に就ては可なり明瞭を缺く點少くないのである。自然、頭髮を伸したり、寺らしからぬ状態を示してゐる點少くない。よく宗侶の中には、宗義の本質ミ寺院の本質使命ミを混同してゐる人がゐる。例へば、淨土宗は念佛を申せばよいのであるから、頭髮をのばしたりなさしても支障ない云々如きそれであります。然し宗義の本質を以つて寺院を論ずる事はお門違ひである。例へば、此所にご飯

がある、そのご飯にはカロリーが充分にあつて、食べれば營養になる。所がそれを猫の食べる汚れた茶碗に盛つて差出したら、如何にカロリーがあるから云つても到底食べられない様に、如何なるものにも、それぞれの本質を使命さ、それに相應はしい形態をなければなりません。念佛だけ申すなら寺は要らないが、然も此所に淨土宗寺院として在存して來た以上、其所には必ず存在の理由がある。されば今回、二祖上人の御遠忌を迎へるに當つて、この點を判然とする事が大切ではないかと思ふのであります。之が明瞭でない淨土宗の寺院に於て、寺院生活をしてゐる理由なきが判明しなくなるのであります。それはそうして、鎮西教學研究の上にも、鎮西上人は寺院を中心とし、僧侶對手に教學の問題を論ぜられた云ふ事も考慮に入れて研究の歩を進むべきと思ふ。例へば別時念佛さか、又は見佛なきを勧められた點なき多分にそこを顧みつゝ味ふべきであると思ふ。見佛をする程までに念佛する事は、寺院に住するほどの者としてはあらまほしき事である。故に鎮西は、在家人は一萬二萬が程でもよいが、出家の身なれば、まして三萬返申し給ふべし（名義集下）等、寺に住する者の在家に異らねばならぬ點を指示されてゐる所もある。

今一つ鎮西教學研究の上に必要な事は、鎮西上人が著述された動機と述作の年代を眺める事である。鎮西は五十一歳の時、師法然上人の寂滅に會はれ、その後十七年程して、六十七歳の時始めて末代念佛授手印を製作され、それから段々只今あります六・七部の書物が出來たのである。尤も鎮西の作と稱するものゝ中にいかゞはしいものもあるが、間違ひなき著述と云はれるものは、兎に角六十七歳以後のものである云ふ事を考へねばなりません。その六十七歳に至つて何故に上人が著述にいそまれたのであるか云ふに、それは自ら授手印の序文に「上人往生の後、その義を水火に争ひ、其の論を蘭菊に致す。還つて念佛の行を失し、空く淨土の業を廢す。悲しい哉、悲しい哉、いかゞせん」。爰に貧道齡ひ已に七旬に及ぶ、餘命又幾くならず、惱ます愁へずして空く止むべけんや。（中略）然師報恩の爲め、且つは念佛興隆の爲め、弟子が昔の聞に任せ、沙門が相傳に依つて之を録して留めて向後に贈る云々」とある所に原因があつた。

即ち當時の教界情勢が師をしてかく書かしめたのである。自然、當時の教界を熟視する必要がある。法然上人滅後に於ける我が淨土教界を眺めますれば、非常な問題が起つてゐるのであります。法然上人が晩年に於て「然るに近來この十箇年以後、無智不善の輩時に到來す」と嘆いて居られるのであります如く、上人在世すでに問題はあつたが、特に滅後に於ては、外は勿論、内にも反法然主義が起つて來た事に注意せねばならない。生前に於てさへ色々な迫害を加へてゐるのでありますから、滅度に於ける反法然主義は非常なものであつた。そこで上人門下に於ては、この反法然主義の盛んな時に當つて、如何にして法然上人の信仰を維持するか云ふ事が非常に重大な問題となつて來たのであります。それが聖光上人の教學の上にも可なり色々な形を持つて現はれて居ります。當時の法然上人に反對する人達の問題は一二でないが、大體、稱名、念佛が非常につまらぬものである云ふ事、摧邪輪の中に云つてゐる一である菩提心を雜行として捨てられた事であります。中に於て稱名念佛を無視し、若くは軽く見る云ふ事は不思議のやうであるが、實は其勢ひが強かつたのである。本來元祖の所謂選擇本願の念佛云ふのは稱名念佛であつて、それに絶對價值を見出された所に法然教學の特色があるのであります。勿論それは善導教學に明了であるやうであるが、見方によつては善導教學は必ずしもさう云はれぬのである。例へば、樺ノ尾の明恵が法然上人を破する際に「自分は法然上人の稱名念佛云ふものが道緯、善導の教へに従つて立てられたものであるならば、念佛門に歸依をしよう」と云つて、善導教學を楯として法然を破してゐるのであり、其他、元祖滅後、門下の中からさへ善導に據つて稱名念佛を重んぜぬものが生じた所を以つて見ても、それは元祖、鎮西の善導觀の特色であるとも云へるのである。加之、その稱名念佛の一元に統一づけられた生活の高調は元祖の特色であつた。この念佛を現在生活に遊履したものゝ如くに考へてゐる宗侶もあるが、それは誤りである。ある人は、現在の生活は戒に依り、未來往生の爲めには念佛を申す云ふ様に指導原理を二元に立て念佛を生活に離して考へてゐる人がある。然し之を元祖の上について見ます時、何所までも念佛が尋常生活の中に行は

れねばならぬ事になつてゐる。この指示は法然上人の上に極めて明瞭であつたが、善導大師の釋の上では稍明瞭を缺くかの如くにも見える。例へば、善導大師は助業ミ正定業ミを分けて前三後一を助業ミしてゐるが、一切の生活ミ念佛ミは何うなるかミ云ふ事にまでは指示されなかつた。而るに法然上人は助業を二つに分けて善導の所謂助業を同類ミし、其他一切の生活を悉く異類ミされたのである。曾て徳本上人は「大小便する事もこれ念佛の助業なり」ミ云はれてゐますが、一切の生活が悉く念佛の中に爲さるべきであり、つまりそれが生命の念佛である。

ある人は法然上人の時に念佛が弘まつたのは、あの厭世的な時代の反映でもあるかの如く云ふ人があるが、それは一分の理あるにしても、それが全體ではない。念佛法門は平安朝に恵心僧都の如きは、一生の間に二十俱低遍の念佛を申して居られる。それは十九歳の時から僧都の命終の時まで一日に一萬遍を申されてゐる事になる。斯様に念佛を唱へる事は法然上人の立教開宗に始つたのではないのである。如何に法然上人のお徳が高くとも、僅かの間にあれまでも弘まるものではない。かの南都の貞慶が九ヶ條の奏狀文を作つて、天皇に奉つたものの中に「畿内は兎も角、地方に至つては實に念佛が盛んであるから、陛下の勅命によつて念佛を停止せねば、到底止める事は出来ない」ミ書いてゐる程、滔々として日本國中に弘まつたのである。それは即ち古く平安朝時代から起つてゐるのであつて、爾來國民の上に普及されて來てゐた素地があつたから、元祖の絶對價値の念佛の點火が恰も燎原の火の如くに弘まつたのである。聖徳太子が勝鬘經ミか維摩經ミ云ふ在家人の説いた經典を以つて日本文化建設の材料ミされたが、その主張は要するに僧俗一貫の宗教ミ云ふ事になる。之が南都の六宗の輸入佛教の爲め中斷された。それが平安朝になつて再び傳教大師が僧俗一貫の宗教を開いた。然し傳教の僧俗一貫の宗教も遂ひに特權的山林佛教になつて了つた。所がその僧俗一貫の宗教を如實に實現したのが即ち法然上人である。理論的には佛凡一體、僧俗一貫ミ云つてゐるが、事實は山林佛教ミなつて了つて一般の人ミは何の關係もない。淨土宗は佛凡の差異があるミ説き乍ら寧ろ民衆的であつた。佛凡一體の宗教が特權的な

つて居り、佛凡の差別を云ふ淨土教が一般的である。この理由は何所にあるか、問題である。天台宗等では戒法を受けて凡夫も佛の姿を現する事が出来る云ふのであつて、私なきも佛凡一體の姿を現はして頭から冠を被つた事がありますが、別段に佛光も放たず、相變らずつまらんものであります。理窟に於ては實に徹底してゐるが、實賤に於ては駄目であります。所が淨土教の實賤たる念佛法門は僧俗一貫して平等になし得るのであつて、之がまた廣く一般民衆に行はれた一理由であると思ふ。勤行なきも始めは全く在家のものゝ變らなかつたのでありますが、途中から在家の者の知らない様なお勤めをしなければ坊さんらしくない云ふ點もあつてか、現在の様になつたものゝ如くであるが、反省せしめられるのである。斯様に、法然以前に念佛法門は盛んであつたが、それゝ元祖の念佛と比較するに内容的に異なる所がある。その一を擧ぐれば、法然上人の念佛は實の念佛であり、生命の念佛であつたから、一つ一つに絶對價值を持つてゐるのである。絶對價值の念佛は一遍で良いか云ふにそうではない。息のある間、何所までもやつて行かねばならぬ。即ち一遍で良い云ふ事もなければ、何遍で良い云ふ事もない。授手印に「八池爲棲以數遍爲基」云はれてゐます。聖光上人は多念を勧められたが、然しその多念は分量のみの念佛ではない。それは生命の念佛が段々重なる事を云ふのである。そこで生命の念佛として稱へる時には一切の生活悉くが念佛でなければならない。仍て我々は宗教生活の中心が何れに在るか云ふに、一切の生活が悉く稱名の念佛に統一づけられたものでなければならない。これが元祖の念佛であつた。然るに元祖滅後、念佛は亡國の聲であるとか、牛の吼へ犬の鳴く如き畜生の念佛であるまで侮辱を與へる者さへ出て來たのであります。之は他宗の者が云ふばかりでなく、法然門下にも稱名念佛に異議を挾む者が少なくなつたのである。弘願義、一念義、寂光土義の三義を見るに、その何れもが稱名念佛を劣れるものゝしてゐる點に於ては同一である。又朝日房信寂の作云ひ又は源智の作云ふ選擇要訣には、法然上人滅後の門下の異議を十箇にまゝめて比難されてゐるが、その何れもが稱名念佛を輕視してゐるのである。中には、選擇集は法然上人の作でない云

つて上人への謗難を避けやうと勤めたものもあつた。それは摧邪輪の中にもさうした事を云つてゐる。その他幾多の材料があるが、要するに反法然思想が可なり劇しかつたのである。この時に當り、何うして法然の教へを弘めて行くべきかと門下の大きな問題であつたのです。而して當時の思想分野を見るに、反法然主義と法然遵奉主義とある。そしてその二思想に共通なのは事大思想、即ち大陸謳歌思想であります。如何に當時漢土の人師を重んじたか云ふ一例を擧げるなら、反法然の急先峰であつた明恵が、如何に間違つてゐても、もしそれが善導の心に叶ふてゐるならば我はそれに従ふであらうとまで明言してゐる事に依つて判明する。そこで法然門下に於ては、それ等支那人師に依つてカムフラジーしやうとしたのである。その時善導を持ち上げんとするものと、曇鸞を持ち上げんとするものとの二つに分れた様である。已に元祖が「偏依善導」と云はれてゐるから、善導を表面に立てる事が適當であつた。その態度をさられた人は、聖光、證空、覺明等であり、一方に曇鸞を持ち上げんとしたのが親鸞であります。而して聖光上人が如何に苦心して法然上人の念佛義を勧められたかに就て一言したい。

京都では北嶺の壓迫も強く念佛を勧める事は困難であつたが、地方ではすら／＼行つた様に考へられるけれど、決してそうではなかつた。昨年九州に行きました時、色々上人の御遺跡を拜見し、又高良山にも行つたのでありますが、その高良の山麓で千日別時を勧められた時、一山の大衆は、聖光をやつ／＼けろと云ふ議が起つたのでありますが、その前の晩に高良山の和尚が不思議な靈相を觀し、遂にその事はやめになつた云ふ事が傳つて居ります。兎に角、高良山の和尚が聖光上人の念佛に反感を持つた事は事實であつたのです。如何に邊鄙であるかは云へ法然の教へを傳へる事は容易でなかつたのであります。故に聖光も、法然上人の宗旨を善導宗と呼ばれ、寺を善導寺と云はれたのもその邊の事情からであると思ふ。傳に依るに上人が彦山に居られた時、夢の中に「善導大師が博多の海に着かれた」と云ふお告げにあつたから、早速船の着く所に行つて尋ねるに、そんな人は來ないが先程氣高い坊さんが此所を通られたと聞て、力を

落して引返して歸つて來る。松の木に尊像があつたので、之こそ善導の化身に違ひない。云ふのでそれを持つて歸つてお祀りしたのが今、筑後にある善導大師である。云はれてゐますが、斯様に夢物語語りにまでかこつけて善導大師を持ち上げられたのは、反法然思想に對する一方策。考へられる。自然善導研究に問題が進む。なる。そこに自から新しい問題も生ずる譯である。彼の見佛三昧を高調され、淨土の菩提心を説かれるなごもその一である。もこの見佛は般舟三昧經に依るのであります。尤も經典史學からは、般舟三昧經が本になつて觀經があらはれた。云ふべきであらうが、二祖の二經觀はさうではない。即ち般舟三昧經は見佛を、觀經は正しくは稱名念佛の勸説にあり、善導に依れば兩三昧を明すものと見られたのである。斯して善導が觀念法門に於て見佛を説かれるときは、般舟三昧經や觀經の觀佛三昧の文を出して觀察正行の典據。なし、見佛を論ぜられたのである。之を元祖に見るに、「今時の行人は觀察を爲すべからず。打ち捨てられたのである。云ふて見佛が悪い。云ふ。云ふのではない。それを一般念佛者の目的とする。困難であつて、易行易修の下機得解を目指した元祖宗教の本意が現はれぬ。然し若しそれが出来るものならば、見佛所期で行つても差支へない。兎に角、元祖の餘り勧められなかつた見佛論は、善導研究の結果である。云ふ事を云へば良いのである。又元祖が菩提心を雜行。打ち捨てられた事は選擇集に明了であり、明惠の反駁がそれを反證してゐる。尤も全集には二ヶ所程淨土の菩提心を説かれた所はあるが、大體の主張は雜行論である。曇鸞、善導に就て之を見るに、鸞師は菩提心必須論者であり、導師の上でも積極的に之を廢した所がないのみならず、寧ろ同發菩提心等の句が少くない。故に明惠は導師の文献を出して元祖を難じてゐる程である。然るに元祖滅後何れも擧つて菩提心をこり入れ、或は淨土の三心を佛の身につけて立派な菩提心である。名乗りをあげる者があり、又鎮西の如きも、淨土に菩提心なし。云ふのは愚者の云ふ事である。云ふて、願を此土に行を彼土に修するのが淨土の菩提心である。云はれた如きは、これ又當時の教界狀勢。支那祖師研究の結果が少くも重大原因。思ふ。特に又、聖光の念佛論は面白い。思ふ。記主が「傳授を

受けぬ人は、故上人の念佛を改めらるゝと思ふなり、この義爾らず」云つて居られるが、全くさうした感じがする。有名な徹選擇集に示さる、廣略念佛がそれである。苟くも佛教である以上、佛を思念せざる行法はない。佛に値遇せずには行が成就せぬ。この意味に於て、一切が念佛であるから、念佛をつまらぬものゝ様に考へるのは誤りである、云ふて彼等を念佛中にこりこんで、然もその中、別の稱名念佛が今時の者に適した最も勝れた法門であるゝ高調されたのである。そして尙、念佛は三福の中、行福の一つである讀誦大乘である。而して三福は六度であり、六度は一切佛を出生する根本である。而して、三福を経には三世諸佛淨業正因云ふてある。さればこの念佛は三世諸佛の淨業正因であるから、一念の念佛でも無量の罪を滅して往生すゝ説かれてゐる如き、元祖が順彼佛願故の一因故に依つて總ての問題を解決されてゐるのに比較して、所謂「故上人念佛の義を改められた」如き感じさへ生ぜしめるのであるが、それは當時教界人に對し、隨他扶宗の意許の所産に外ならぬのである。

其の他巨細な點について述ぶべき事も多いが、今は僅かに鎮西教學研究の用意について一二の心得べき點を述べたのに外ならぬ。要するに、鎮西教學研究に際しては、其著書が元祖滅後異義叢起して本義の漸く廢せん事を慨かれての對他的意味が多分にある事を、そして當時の思想上權威あつた支那祖師を表だてゝ教學を樹立した事、其他地理的關係なきを充分に考察して其真相を把握すべきものであると思ふのである。特に淨土宗寺院の本質使命形相の確立は聖光忌を迎へるに當りて、我が宗の企つべき唯一報恩事業でないかと思ふのである。(宗研部主催講演會筆記)